『復活のイエスを見るところ』ヨハネ20:19-29

20:19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。
20:20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。
…
20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。
20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。
20:26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。
20:27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。
20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。
20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

●序論
「世界観」という言葉。人がそれぞれが住まう国や家庭環境の中で培われてきた、その人の生きざま決めるような、信仰や哲学、在り方や良識といったものでしょう。
そしてそのような世界観は、現代の世の中の諸事情の変化の中で、あるべき自分を保つためには大切のものです。
では、クリスチャンとしてのわたしが持つ世界観をどう表現できるか。
”天地万物を造られた善い神さまが存在し、この方がわたしたちを真実に愛してくだ去っていることを信じている。わたしは今、その愛に支えられて生かされている。”ぱっと一言で答えろと言われたら、わたしはそう答えるかもしれません。
こんな答えには、いろいろ批判もあるかと思います。科学的ではないなどと。
それでも、わたしは、聖書が証しする神さまから目を離すことはできません。
この世の常識や、価値観は、時代の変遷の中でさまざま変わります。
その情景の変化の中で一喜一憂し、また不安を抱えることもあるのが現代です。
わたしは、そんな時代の動きの中にあっても、神さまの愛に支えられ、導かれて生きる自分を大切にしていきたいのです。

●本論
Ⅰ．十字架をめぐる正義のゆくえを見る

復活に触れる前に、イエスさまの十字架の死があったことを見ておかなければなりませ

ん。愛する弟子の裏切りにあい、人々に捨てられ辱められ、十字架につけられた。
　それは、キリストをめぐる悪意と妬みが殺意にまで達した残虐さでした。
その殺意こそ、人の罪の現実でしたが、どれだけ人がそれに気づいていたでしょうか?
　もしかしたら、多くの人が、”自分たちはイエスを十字架につけて、自分たちは正義を果たした、だってイエスは死んだ。神さまも黙っていた。だから俺たちは勝った。正しいんだ”…と思っていたかもしれません。
教会の賛美に「罪深いわたしを」というフレーズを聞くことがあります。
　普通なら、歌とは言え、そんなことは言いません。でも賛美にはあるのです。
　なぜなら、そこには続きがあるのです。「神さまは、そんなわたしを愛してくださった。その証こそイエス・キリストの十字架による罪の赦しだ、救いだ」と。
クリスチャンは、まことの愛なる神さまを信じているからこそ、自分を罪深いと気づくことができます。認めることができます。そして告白することができるのです。
　なぜなら、そんなわたしだけれども、神さまに愛され、また赦されている安心があるからです。それがクリスチャンが生きる世界です。
　罪が罪のままで終わらないのです。

今、まだそれを知らないでいた弟子たちの姿がそこにありました。
　　:19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、
恐れと不安という暗闇が満ちるような締め切った家の中に、復活のイエスさまの方から入ってきてくださったのです。
　　:19-20…イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。
　「安かれ」つまり「平安があなた方にあるように」「平和があなた方にあるように」、シャロームという、挨拶。それは、日常の挨拶以上のものでした。
　　そこにいた弟子たちは、イエスの死という現実を見て、絶望していました。こんなに立派で神の子・救い主と思っていた方が、死んでしまった。殺されてしまった。だから終わりだと。それが彼らが握りしめていた世界観の限界でした。
　　さらに、自分たちは、この方に背を向け逃げ出してしまった。見捨てたのは自分たちだ。…というような負い目も抱えて、自分自身に失望していたのです。
　　それがあの戸を閉め切った部屋の現実です。
しかしそこにイエスさまが、入って来られてまさに「平安」を宣言されたのです。
　イエスさまでも、救い主でも、神の子でも死んだら終り！？というような世界観は吹っ飛びました。イエスさまこそ、救い主だとわかったのです。

十字架をめぐる正義のいくえについて、決着がここで示されています。
　のちにペテロは、イエスを十字架につけた町で聖霊に満たされて大胆にこう語り、人々の心を打ちました。
　　使徒2:32,36　このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。… だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとし

てお立てになったのである」。

Ⅱ．復活がもたらす神由来の平安

:19 …イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ(平安があなたがたにあるように）」と言われた。

この平安は、どこまで、どんな人にまで通用するのか？　聖書は証しします。

使徒13:39「信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのである」

だから、イエスさまが平安をもたらすとき、それを受け取る者すべてに与えられるものなのです。それが復活のイエスさまがもたらした平安、平和です。

「もしイエスさまがよみがえらなかったとしたら」と想像してみてください。

聖書はこう語ります。

1コリント15:17 もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになろう。

たとえ事実、神の愛があっても、それだけでは救いは完成されないというのです。

なぜなら、死んだままのイエスさまの物語が、示すのは、神の愛とは対照的な、イエスさまを殺すほどの、人の残虐性となるからです。人はは罪責感をつのらせるだけです。

しかし神は、キリストを通して、死が死で終わらない世界をお見せ下さいました。

だから、キリストによる罪の赦しとその確信を得たい者は、「事実キリストはよみがえられた」ことを信じて受け取ることが大切です。このキリストのよみがえりは、赦しを受け取る私たちを解放するためのものであるのです。

これがイエスさまがくださる平安です。この平安でわたしたちは、この世のあらゆる責めや不安から自由にされます。まさにかつてイエスさまが約束したとおりです。

わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。（ヨハネ14:27）

Ⅲ．信仰へのイエスのアプローチ

:27「…信じない者にならないで、信じる者になりなさい」

よくトマスのことを疑い深いと言われることがありますが、この疑いは本物を吟味するために大切です。

もしただ疑うための疑い、信じないための疑いとは違います。それならば、何を見ても体験しても信じないとの宣言となります。

しかし彼はイエスさまに会いたかったのです。ほかの弟子たちが見たように自分の目で、手で触って、イエスさまを体験したかったのです。ある意味、信じたいがための、もっとも切ない葛藤の期間を経験していたのは、このトマスでしょう。

そんな彼にイエスさまの方から現れてくださり、声をかけてくださいました。

それが、このところにある「信じる者になりなさい」という語りかけです。

彼は、このイエスさまとの出会いで、変えられていきました。

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

覚えていてください。このトマスはその疑い深い探求心が実を結んで、復活のイエスさ

まを主と呼ぶことができたのではありません。イエスさまが来てくださったからです。
この信仰の事柄には、イエスさまの方からのアプローチがあったのです。
自分さえしっかりしてれば信じられるという世界ではなく、イエスさまがわたしたちを、その恵みで覆い、信じる者へと変えてくださっているのです。
だから、本物の信仰の事柄は、すべてはイエスさまはじまりだとわかります。

〇最後に
トマスに現れたのは、最初の日から八日目、つまり丸一週間たっての出来事でした。
しかし、そこはまだ「戸がみな閉ざされていた」とあります。あんなに喜んでいたはずなのに…そう思います。　注目は、ここでも
:26…閉ざされていた『が』、イエスさまが入ってこられ中に立って、「安かれ」(平安があなたがたにあるように)と言われた」とあるのです。

ここでもイエスさまからのアプローチは続いています。彼らが信仰によって回復され、立ち上がり、そして整えらえてのち、聖霊に満たされてその信じるところを証しする者となるための、丁寧なアプローチです。
今も、イエスさまは、わたしたちを遠くから眺めているお方ではなく、今もわたしたちを霊的に、気づきと祝福をくださりながら導いてくださっているのです。
わたしたちは今も、キリストの恵みから始まり、恵みによって成長させていただく者とされています。
人は自分で自分を変えることはできません。でも復活の主の恵みは、そのイエスさまとの霊的に共に歩む歩みは、わたしたちを変えてくださいます。
だから私たちはこの方についていきたいと、今改めて心から告白できるのです。